寄　稿

「戦史叢書」刊行 30 周年に寄せて

防衛研究所戦史部長　加賀谷　貞司

戦史部は、皆様ご存知の通り、かつて昭和 41 年から 55 年にかけて自衛隊の教育又は研究の資とすることを主目的として、太平洋戦争に関わる「戦史叢書」を 102 巻刊行いたしました。今年（2010 年）、その最終版となる『陸海軍年表（付・兵器・用語の解説）』の発刊から 30 年目を迎えることとなります。

『戦史研究年報』においても、その 30 周年を期して、かつて戦史編さん官として、叢書編さんに携われた方々の当時のエピソードや今後の戦史部に対する期待、あるいはこれまで「戦史叢書」を利用する立場の研究者の方々から、叢書に対する想いや問題点などについての寄稿文をいただき、それらを掲載することといたしました。

これまで「戦史叢書」は、太平洋戦争を研究する多くの研究者、あるいは自衛官教育の貴重な資料として広く部内外に活用されているところでありますが、その一方で、多くのご指摘・ご意見等を賜り、逐次、「戦史叢書正誤表集」を作成し、現在に至っております。

その中に、戦史叢書が有する多くの問題点、例えば、「太平洋戦争の陸、海軍別の開戦経緯について、内容やレベル等の斉一性に欠ける」でありますとか、あるいは「作戦・戦闘が中心の記述で、全体像がつかみにくい」等の様々な指摘をうけ、更にこれらの問題点を是正するため「戦史叢書をリメイクしてはどうか」とか、「102 巻はあまりに膨大なので要約版を出したらどうか」との要望も数多く寄せられております。

しかしながら現在の戦史部が保有する研究力は、叢書編さん当時の十分の一以下、具体的には、当時の編さん官、調査官は延べ 100 名以上、ほとんどが戦争経験者であり、彼らが旧軍人等に実施したヒヤリング延べ 15,000 人、史資料約二十万件を収集・調査し、準備段階からすると実に 20 年以上もの歳月をかけて編さんしたわけですから、現有する研究力では能力的に、そして時間的にもこれらの要望に直接的にお応えすることは出来ません。

それよりも新たな視点あるいは新たな史料の発見から“太平洋戦争を見つめ直す”ことの方が実行可能であり、より意義のあることと考え、部の中期構想として、平成 27 年（2015 年）を目標に新たな「太平洋戦争史」（仮称）編さんを目指すこととしました。

幸い、平成 19 年度事業から海外史資料の調査・収集事業が認められ、各国に四散した旧日本軍の散逸史料、あるいは連合国等による対日戦争指導史料を調査・収集することができるようになりました。既にアメリカ・イギリス・フランス・台湾及びオランダにおい

て事前調査し、それらの史資料の所在を確認するとともに、アメリカにおいて本格調査を実施し、一部貴重な史資料（開戦時、昭和 16 年 12 月の連合艦隊の「戦時作戦日誌」が、米国メリーランド大学の図書館で発見できました。翌昭和 17 年 1 月以降の日誌は、防衛研究所史料室において所蔵していますが、昭和 16 年 12 月分の日誌のみが欠落していたため、研究者にとって大変貴重な史料となりました。）を収集することが出来ました。今年度は、ロシアでの事前調査及びアメリカでの本格調査、22 年度は中国での事前調査及びロシアでの本格調査により、引き続き新たな史料の発見に努めてまいります。

また戦史部研究会において、かつて「戦史叢書」編纂に関わった方々からの貴重な経験談や、部外の研究者による太平洋戦争に関する研究発表の実施、更には例年外国の研究者を招聘し実施する「戦争史研究国際フォーラム」においても、平成 19 年度以降太平洋戦争をテーマとして、日本側及び連合国側それぞれの立場から、戦略あるいは戦争指導レベルの発表･議論を通して、新たな「太平洋戦争史」（仮称）の執筆に役立てています。

歴史研究に携わる研究者の心情として、“歴史的事実というものを、出来るだけ立体的に捉えたい。そうでなければ、それが将来に示すメッセージとしては、あまりに平板的で深みの無いものになってしまう。”という考え方があります。

歴史研究の役割は、過去の事実を出来るだけ忠実に「復元」し、現在の人々に提供すること、そしてその提供を受けた人々は、それぞれの立場（視点）において、将来への指標の一つとして、それらを活用することにあります。

一方でこういった作業は、実に困難を極めるものであります。史料の限界、すなわち我々が目にすることが出来る史料は当然全てを現すものではなく、断片的かつ一方的であり、例え多くの埋没した資料をつなぎ合わせたとしても、史料が全てを物語っているわけではありません。さらに、その史料の読み手の問題、具体的には研究者の経験や能力、言語の壁などにより、ややもすると一面的な解釈にとどまり、とてもその完全なる復元などあり得ないものとなってしまうかもしれません。

それでもなお、われわれは日夜その歴史的事実に対し、より真実に近づくことを目指しているのです。

「戦史叢書」は今や太平洋戦争を研究する上で、わが国第一級の資料的価値を有する大作であります。しかしながら、防衛研究所戦史部において、その後新たな“戦史編さん”を実施してまいりませんでした。

今回の「戦史叢書」完結 30 周年を機に、我々は「戦史叢書」編さんに携わった全ての方々への感謝の意を表すとともに、これから戦史部が目指す新たな「太平洋戦争史」（仮称）編さんにおいて、より立体的な“歴史的事実”の叙述に努力してまいりたいと思います。